

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：12606

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K19943

研究課題名（和文）「長い13世紀」のヨーロッパ音楽におけるリズム理論の黎明と変遷

研究課題名（英文）Theory of Rhythm in the Long Thirteenth-Century European Music

研究代表者

井上 果歩（Inoue, Kaho）

東京藝術大学・音楽学部・研究員

研究者番号：60908119

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：先行研究では計量音楽のリズム理論と計量記譜法は13世紀前半か半ばに黎明したとする説が強かったが、現存最大規模の計量音楽の選集I-FI Plut. 29.1（1245-1255年頃に成立）がまだ計量記譜法を用いていないこと、また計量音楽のリズムに言及した理論書の成立年が1270年以前に遡れないことから、これらは1250-1260年代にはまだ体系化されていなかった可能性を指摘した。また、1280年頃にはフランコによる新しい理論と記譜法が瞬く間に広まったため、「前フランコ式」と呼ばれる初期のリズム理論と計量記譜法は1270年代におけるわずか10年間しか実践的に用いられなかったと結論づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は「長い13世紀」（1160年頃-1330年頃）という西洋音楽史上の時代区分を日本国内に周知させ、この時代がヨーロッパ音楽史上の一つの大きな転換期であることを、計量音楽のリズム理論と計量記譜法の黎明という観点から強調することにある。また、本研究の社会的意義は、音楽という物質ではなく演奏を通して受け継がれる「知的遺産」の保護と振興を行うことで、現在はその伝統が失われてしまった長い13世紀のヨーロッパの音楽を一般の人のレベルで体験・継承する機会を設けることにある。

研究成果の概要（英文）：Although much scholarship has argued that mensural theory and notation originated in the first half or the middle of the thirteenth century, in this study, I hypothesise that they had not yet appeared or been systematised in the 1250s or the 1260s -- not only because one of the largest extant compilations of mensural repertoires I-FI Plut. 29.1, arguably edited between 1245 and 1255, is written in pre-mensural notation, but also because the treatises on early mensural theory that have survived today are dated to no earlier than circa 1270. Additionally, I conclude that the earliest form of mensural theory and notation, which is designated as 'pre-Franconian', seems to have been practised for only ten years due to the rapid dissemination of Franco of Cologne's novel mensural principles after c. 1280, which had been influential until mensural music itself began to decline at the end of the sixteenth century.

研究分野：音楽学

キーワード：計量音楽 計量記譜法 アルス・アンティクア 記譜法 音楽理論 13世紀

1. 研究開始当初の背景

音楽史研究において近年注目を集めているのが、長い13世紀(1160~1330年頃)をヨーロッパ音楽の大きな転換期とする考え方である(Mark Everist (2016) 他)。この時代、教会音楽・世俗音楽問わず多種多様なレパートリーが創作されるようになり、ヨーロッパの音楽文化が類を見ない活力でもって花開いた。このような長い13世紀の音楽が持つ文化的エネルギーは、音楽外の要因に強く起因しているであろう。ヨーロッパでは11~12世紀より各都市に大聖堂や大学などが設立され、特に12世紀にはイスラーム世界から様々な学術・思想が流入した。これにより大聖堂では音楽が盛んに演奏され、大学では音楽が自由七科の一つとして学ばれるようになった。加えて一連の学問運動により、古代ギリシア・ローマの文学が見直され詩の創作が活発化するが、音楽も詩に合わせて数多く作曲されるようになった。

そして、長い13世紀の中でも、このような都市文化の発展と学問運動を受けて目覚ましく発展したのが計量音楽である。計量音楽とはリズムを伴った音楽のことで、長い13世紀においては特に教会で演奏されるポリフォニー音楽(複数の声部からなる音楽)を指す。一方、それ以前に成立した単旋律の聖歌(例:9世紀頃成立のグレゴリオ聖歌)や初期のポリフォニー音楽(例:9世紀頃成立の2声の平行オルガヌム)は、具体的な拍を持たずフリーリズムで演奏されたと考えられている。第4無名者(1280年頃活躍)の証言によれば、計量音楽の作曲はペロティヌス(12世紀末活躍)らによって、12世紀後半にはパリのノートル・ダム大聖堂を中心に行われていた。しかし、書物の中で計量音楽という語が現れかつそのリズム理論が成文化されたのは、約1世紀後の1270年頃になってからのことである。そこで次のような問いが立てられる。なぜ1270年頃になってようやく計量音楽が述べられるようになったのであろうか。それ以前にリズム理論は存在していなかったのであろうか。この空白の1世紀の間、人々はどのようにして計量音楽のリズムを理解し演奏していたのであろうか。

2. 研究の目的

このように、ヨーロッパ音楽におけるリズム理論の黎明に関してはいまだ多くが謎に包まれている。従って本研究の第一の目的は、長い13世紀においてリズム理論がどのようにして誕生したのかを解明することにある。具体的には、1270年以前に成立した計量音楽は楽譜の中では残っているため、これらを1270年頃~1330年頃に成立した音楽理論書におけるリズム理論と比較し、両者にどのような共通点・相違点があるかを探る。

さらに、長い13世紀に成立したリズム理論は、ケルンのフランコ『計量音楽技法』(1280年頃)の影響を受けた「後フランコ式」(1280年~1330年頃)と、それ以前の「前フランコ式」(1270~1280年頃)とに二分される。前フランコ式の理論書は現存のところ9点あるが、そのどれもが多かれ少なかれ互いに異なる見解を述べており、書物にリズム理論が登場した最初の約10年においては、リズムに関する議論は混沌としていたことが分かる。しかし、1280年頃にフランコ『計量音楽技法』が成立すると、以降の音楽理論書はこぞってこの著書のリズム理論を引用するようになる。では一体、フランコの理論は前フランコ式の理論書とどのような点で異なっていて、またどのような点で支持を受けたのであろうか。本研究では、前フランコ式とフランコ・後フランコ式の理論書とを比較することで、長い13世紀においてリズム理論がどのようにして変遷したのかを考察することを第二の目的とする。

3. 研究の方法

本研究の方法としては、楽譜写本の中に残るリズム理論が登場する以前に成立した計量音楽(12世紀後半~1270年)と、これらを1270年頃から1330年頃に成立した音楽理論書におけるリズム理論とを比較し、両者にどのような共通点・相違点があるかを検討することが挙げられる。

より具体的な研究計画として、1年目である令和3(2021)年度は、特に第一の目的に焦点を当て、1270年より前に成立した楽譜写本17点(*I-FI* Plut. 29.1 他)における計量音楽の楽曲を、長い13世紀の音楽理論書、とりわけ前フランコ式の9著作で述べられているリズム理論と比較した。2年目の令和4(2022)年度は、とりわけ第二の目的に着眼し、前フランコ式の理論書とフランコ『計量音楽技法』および10の後フランコ式の理論書(無名者『現代人は簡潔さを賛美し』他)とを対照させ、リズム理論の変遷を探った。加えて、1270年以降に成立した楽譜写本15点(*F-MOFH* 196 他)における計量音楽の楽曲も分析し、前述の1270年以前に成立した楽譜写本17点といかなる点で共通・相違しているか、音楽理論書で論じられているリズム理論がどの程度記譜で実践されているのかを究明した。最終年度である令和5年度は、前年度に新型コロナウイルス感染症オミクロン株の蔓延によって調査を断念した音楽理論書や楽譜写本の分析を行った。具体的には『現代人は簡潔さを賛美し』(1300年頃)を収めた写本 *I-BGc* MIA 266 と *I-BGc* MAB 21 等を調査対象とした。

4. 研究成果

まず1年目で得られた研究成果として、現存する前フランコ式の理論書の推定年代から計量音楽のリズム理論は1270年前後に成立した可能性を指摘した。そして、ここから「計量記譜法」も同時期に成立したとの仮説を立てた。計量音楽は、黎明期の12世紀後半から13世紀半ばまで、個々の音符は音の長さを示す左図音の高低のみを表す「前計量記譜法」（あるいはネウマ譜）で書かれていたが、前フランコ式の理論書では音の長さを音符の形で区別した計量記譜法に言及しており、この記譜法は同時期の楽譜写本でも用いられている。しかし、13世紀の楽譜写本のうち正確な成立年代が判明しているものはほとんどなく、計量記譜法がいつ誕生したかはこれまで謎に包まれていた。しかし、現存最大規模の計量音楽の選集である *I-F/Plut.* 29.1 は1245～1255年前後に計量音楽の実践と理論の中心であるパリで編纂されたことが分かっているが、この楽譜写本では依然前計量記譜法が使われていることから、計量記譜法は1250年前後以降に（おそらくは計量音楽のリズム理論の黎明とほぼ同時期の1260～1270年頃に）登場したと推定した。先行研究では、計量音楽のリズム理論および計量記譜法は13世紀前半や半ばに黎明したとする説が強かった。しかし、上記の研究成果は、このような西洋音楽史の通説に疑問を投げかけるだけでなく、計量記譜法の楽譜写本のうちこれまで1240年代～1260年代と推定されていた資料の成立年代を再度検討する必要性を強調している点で意義深いものと考えられる。

2年目より得られた成果としては、後フランコ式の10の理論書全てがフランコ『計量音楽技法』第7章のリガトゥーラの教えを引用していたことが明らかになった点が挙げられる。リガトゥーラとは複数の音を連結した音符のことで、前フランコ式理論ではリズム・モードと呼ばれるリズム・パターンの種類（前フランコ式では6種類が基本）によって、同じ形のリガトゥーラでも音価の読み方が変わることがあったが、フランコはリズム・モードの種類に関係なく、1つのリガトゥーラの音符の形状に対して、1つの音価の配列（あるいはリズム）のみを与え、その分々なリガトゥーラの記譜を考案した。このフランコのリガトゥーラの規則は前フランコ式理論およびリズム・モードが廃れた14世紀以降も音楽理論書や楽譜写本で使われた。特に1270年頃から1300年頃の間編纂されたモテット集 *F-MofH* 196の場合、古いファシクルは前フランコ式のリガトゥーラで書かれているが、新しいファシクルにはフランコの新しいリガトゥーラが用いられており、これはこの楽譜写本の作製の途中でフランコ『計量音楽技法』の教えが急激に広まったことを意味する。一方、フランコは前フランコ式の6種類のリズム・モードを5種類に再編成したが、後フランコ式の理論書のうち半数以上が従来の6種類の方を採用しており、この点に関しては前フランコ式理論の影響力の強さが確認できた。

また、最終年度の分析から、後フランコ式の音楽理論書や楽譜写本ではケルンのフランコ『計量音楽技法』の影響が見られるものの、その教えを全て反映しているわけではないということが明らかになった。例えば『計量音楽技法』第12・14章で述べられているコブラやオルガヌムといった1280年以前よりある計量音楽のレパートリーに関しては当時の実践にそぐわなかったのか、今回調査した後フランコ式の音楽理論書では引用されていないことを指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 井上 果歩
2. 発表標題 アルス・アンティクァ期におけるリガトゥーラの機能:理論と記譜の観点から
3. 学会等名 西洋中世学会第14回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上 果歩
2. 発表標題 モンペリエ工写本：アルス・アンティクァの計量記譜法の変遷を読み解く
3. 学会等名 西洋中世学会第14回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kaho Inoue
2. 発表標題 Theory and Practice between Ars antiqua and Ars nova
3. 学会等名 The 21st International Musicological Society Congress (IMS 2022) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上 果歩
2. 発表標題 「後フランコ式」とは何か：理論と記譜法の観点から
3. 学会等名 日本音楽学会第73回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上 果歩
2. 発表標題 アルス・アンティクァ期におけるリガトゥーラの機能：理論と記譜の観点から
3. 学会等名 西洋中世学会第14回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上 果歩
2. 発表標題 モンベリエ工写本：アルス・アンティクァの計量記譜法の変遷を読み解く
3. 学会等名 西洋中世学会第14回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kaho Inoue
2. 発表標題 Theory and Practice between Ars antiqua and Ars nova
3. 学会等名 The 21st International Musicological Society Congress (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kaho Inoue
2. 発表標題 Reading Misunderstanding: Medieval and Renaissance Mensural Theory after c. 1600
3. 学会等名 The 6th Conference of the International Musicological Society Regional Association for East Asia (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上 果歩
2. 発表標題 譜例における音楽理論家と筆写者の齟齬: フランコ『計量音楽技法』(1280年頃)を通して
3. 学会等名 西洋中世学会第15回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kaho Inoue
2. 発表標題 Discordance between Authors and Scribes in Medieval Musical Treatises: Ligature Notation in Johannes de Garlandia's 'De musica mensurabili'
3. 学会等名 The 7th Conference of the International Musicological Society Regional Association for East Asia (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------